



暗闇は、物語を照らす

想像してみてください。演劇を観に来たかと思えば、劇場の地下に連れて行かれ、30年間放置された8メートル四方の部屋に50人ほどの他人と押し込まれます。周りを見渡すとボロボロだけど、興味深いシミや傷のついたレンガに囲まれています。その部屋を照らし出すのは、天井につけられた煌煌と光る蛍光灯。窓を鉄板と木板で釘打ちされている、密封された部屋。去年訪れた、アウシュビッツ強制収容所のガス室を思い出させるその部屋には、古い木椅子が外向きに円に並べられてあり、ワイヤレスのヘッドセットがそれぞれの椅子の背もたれにかけられています。普通の劇場公演なら、公演が始まる前に緞帳が空いている場合、物語の手がかりとなる舞台上のセットや、配られたプログラムを眺めているでしょうが、この公演は、レンガの壁を目の前にして座らされ、ヘッドセットを装着させられます。観客は、次にいったい何が待ち受けているのか、想像もつかないでしょう。

入り口が封鎖され、教会で聞かれそうな死者ミサのコーラスの一章節が大音量でながれ、その勢いそのまま暗転。そのまま暫く暗闇が続きます。目を開けているのか、閉じているのかは分からないくらいの闇の中、観客は何者かに耳元で囁かれ、鳥肌が立つようなぞっとする感覚を耳から覚えるでしょう。というのも、装着させられたヘッドセットから聞こえてくるのは、(360度マイク=バイノーラルサウンドシステムを使って)違う部屋から物語を語る役者の声で、耳元で囁かれているように聞こえます(録音ではなく生演技)。ザ・ストーリーテリングの公演なのです。『それだったら、家で本を読んだ方がマシだよ。』と思われるかもしれませんが、このハイテクなバイノーラルサウンドシステム

で想像力をくすぐられる体験は、家では味わえないでしょう。でも、なぜこの特別な地下室でなければならなかったのでしょうか。「それは、このスペースをプロデューサーに提供されたからだよ」と、ざらりと演出家は言いました。

さあ、ここで困ったのは照明デザイナーです(自分)。演出家からの要望はこうでした。「この素晴らしい個性ある空間を、飾り付けせず(=舞台装飾なし、セットも客席の椅子のみで、それ以外、何も付け加えない)、ありのまま使いたい。照明もできるだけ、すでにそのスペースに存在する照明をそのまま使う方向でお願いします。ミニマルに。物語を率直に観客に伝えること、観客の想像力を最大限に引き出すことが、この公演の一番の課題です」。3つの物語を、3つの地下室で行うという、観客移動型公演。でも、語り手の役者は別の部屋でマイクに向かって演技をしているので、観客は役者がラストシーンまで見えないという演出。演出家の例のミニマルな希望により、舞台美術家は観客席の椅子だけ選んで、あとは不在でした(給料泥棒?!)。つまり、ビジュアルの責任は、すべて私に降りかかってきたわけです(汗)。『私は一体、照明で何を見せればよいのだろうか…。部屋の個性(傷だらけの壁、古い暖炉、板張りされた窓など)。その中で特に物語に関係性のあるものは、部屋ごとに1~2つのみ。強弱をつけて、それらを照らしても、1物語30分は持ちこたえられない…。明かりは、この公演にどんな役割を果たすのか。照明はないほうが良いのではないか?』当初は相当悩みました。部屋を照らすという概念を、一度頭から切り離さなければと思いました。何かを照らすのではなく、闇と影を作ることと専念する方向性でいこうと演出家

に相談し、何週間かにわたって、地下室で役者、音響デザイナーとともに実験を重ねました。観客の影をレンガに映し出したり、灯体自体をセット/物語の一部として使ったり、濃いスモークと光の鋭いビーム、又は完全な暗闇というのも試しました。観客の立場になって、物語を聞くということに、ここまで全神経を集中させた仕事は、これが初めてだったのではないかと思います。舞台がない、役者が見えないという部屋の中で、少しでも明かりを変化させると、視覚はそこに気をとられて、台詞の何行かを聞き逃してしまいます。知覚とは、予想以上にデリケートなものです。重ねた実験の結果、1時間半の公演の約半分は、完全なる暗闇という照明に辿り着きました。そのプロセスの中で、演出家が大胆に、次から次へと私のアイデアをカットしたのも事実です。『それも実験の内!』と、クヨクヨせず、負けずにこちらもどんどんアイデアを出していきました。こんな個人的な空間を面白く見せないのは、照明家として失格!という意地もあったからです。

このプロセスを通して、闇は照明の大事な一部ということ、新たな視点で学ぶことができました。視覚を、完全にシャットアウトすることによって、他の知覚の潜在能力を引き出す手助けをするということ。20~30分間の完全なる闇から解き放たれたときに、初めて目にする明かりへの感動と目へのごちそう。身体で照明を感じるダイナミックさは、闇を如何に制御するかにかかっているということを実感しました。

この15年の間に、イギリスで大いに流行り、展開されてきたサイトスペシフィックシアター(劇場ではないスペースを使って行う、観客移動型/時には参加型公演)の醍醐味は、その特別な建物や空間の特徴、歴史、文化を活かした演出がほとんどでした。しかし、このプロダクションで、演出家ジェイミー・ロイド氏はあえて、全くそれとは逆の方向に向かっていくという、新しい挑戦の意がひひしと感じられました。「観客の想像力に委ねる」という彼の意思と、この不思議な空間と物語に放り込まれた観客を繋げる架け橋に、少しでも貢献できたことと願います。



Shoreditch Town Hall劇場の地下公演
『KILLER』のリハーサル風景



バイノーラルサウンドシステムと
果物等を使った音響効果